



巻頭インタビュー p.2

落語家

林家 づる子さん

知っておきたい教育 NOW p.4

- ①生徒の健全育成につながる
部活動地域展開における指導者の育成
- ②子どもの学びを深める
デジタルと手書き（紙）の最適な活用

きょういく見聞録 p.8

むなかた子ども大学の挑戦
～本物から学ぶ。本物を体験する。
地域総がかりで育む子どもたちの志～

地球となかよしトピックス p.10

「つながり」の中で育つ上瀬谷の子どもたち

北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

【連載第3回】
10代の読者に向けた本づくり
～岩波ジュニア新書の取組～

Front Runner p.15

【連載第1回】
ことばの教育・ことばと教育

ほっとな出会い p.16

自然写真家 **上田 優紀 さん**

落語を通して 子どもたちに伝えたい 「笑いながら、柔らかく生きる力」

落語家 | 林家 づる子さん

女性の視点で古典落語を
描きなおす挑戦

酒に吞まれて仕事を怠ける夫を改心させるために、妻が優しい嘘をつく「芝浜」、夫の放蕩が原因で離婚した夫婦が、家族の絆を取り戻す「子別れ」。いずれも夫婦の愛や、家族愛に溢れた素敵な噺なのですが、ふと、妻のほうの心情が気になったのです。「当然のことのように夫に尽くしているけど、彼女たちにもいろんな葛藤があったのでは？」と。そこで、女性側の視点に立った新解釈の落語に取り組み、2020年にお徳の心情を盛り込んだ「子別れ」を、その年の冬にお光を主役にした「芝浜」を初披露しました。両作とも根強いファンがいる古典落語の名作です。「こんなのは芝浜じゃない！」というような反応が来ることも当然ありえるわけで、初披露の直前まで、怖くて怖くて、不安に押しつぶされそうになっていました。けれども、いざ当日を迎えてみると「おもしろい試みだね」「つる子にしかできない噺だね」というお言葉をたくさんいただき、胸をなで下ろしました。

そもそも、落語は柔軟で自由度の高い古典芸能です。人によってサゲが違いうこともあるし、時代とともに展開が変わっていった噺もあります。「芝浜」は明治時代の名人・三遊亭圓朝師匠が、

お客様からお題をもらって即興で作ったというのが定説ですが、その時点では今のような人情噺ではなく、滑稽噺だったそうです。時間の流れや歴代の師匠たちに磨かれ、柔軟に変容してきたことを鑑みると、過度に変化を恐れなくてもいいのではないのでしょうか？その時代の価値観によって違和感なく楽しめる内容は変わるもので、例えば、武士である父の名誉を守るために、娘が自ら遊郭に身を売る「柳田格之進」という噺があるのですが、男性のかたからも「いくら昔の話とはいえ、さすがに娘がかわいそう」というお言葉を聞くことが増えてきました。現在、娘の絹を主人公にした「柳田格之進」の裏側の噺にも取り組んでいます。

「与太郎」の存在が
教えてくれるもの

小学校で行う「学校寄席」では、なるべく全学年で一緒に聞いてもらうようにしています。というのも、5、6年生になると、周囲の様子を気にして無邪気にふるまえない子もでてくるのです。しかし、その隣で1、2年生たちはゴロゴロ転げ回りながら大笑いしている。すると、高学年の子どもたちも安心して笑うようになるんです。実は私の母がよく笑う人で、私も楽しくなっているのか一緒に笑っているんです。落語は噺家の話芸を一

方的に見せられるのではなく、感情の連鎖がおこって、その場にいる全員で一つの空気を作り上げていくものです。最後は講堂いっぱい子どもたちの笑い声が響き渡り、先生がたもニコニコされていて……。学校への訪問は自分にとってかけがえのない時間になっています。

演目は「牛ほめ」など与太郎が登場する噺を選ぶことが多いですね。与太郎はいわゆるおバカさんキャラで、トンチンカンなことばかりするのですが、どの噺でも与太郎は愛されていて、周囲の人も「困ったやつだ」と言いながらも与太郎を温かく見守っているのです。「いろんな子がいていいんだよ」「失敗してもなんてことないよ」という柔らかなものの見方や、生き方を子どもたちが感じ取ってくれたらうれしいですね。そもそも、落語に完璧な人や問題のない人は登場しません。つい見栄を張ってしまったり、欲を出してしまったり……。そんな愛すべき人間の愚かさを受け入れる優しさが落語に



はあるのです。江戸時代の人々も、失敗したり落ち込んだりしながら、それでもそれを笑いに変えたり、寄席に集まってストレスを笑い飛ばして生きてきたわけで。そう考えると「みんな同じなんだ」「完璧じゃなくてもいいんだ」と励まされる気がしませんか？

子どもの頃にこそ、想像力を養う落語を

最近、動画を倍速で見たり、あらすじだけを簡潔にまとめたファスト映画が流行っているそうですね。それ自体を否定はしませんが、ファスト文化に最も馴染まないのが落語だと思えます。というのも、高座にあるのは、扇子一本と手拭い一枚、そして人間が一人だけ。演者は少しの動作や声、口調の違いで何人もを演じ分け、たっぷり間をとったり、逆に畳みかけるような早口でまくしたてたりします。一律に倍速にしてしまうと内容が掴みにくくなるうえ、お客様に想像していただくための「間」がなくなるのです。落語は、聞き手側が長屋の雰囲気や、おかみさんや魚屋さん、武士や幽霊を頭で思い描いて初めて成り立つエンターテインメントです。読書って、活字だけで場面や人物を想像していると思いますが、落語を聞いているときも似たような脳の使い方をしているんですよ。子どもたちが頭のなかで描いたお

かみさんは、みんな違うおかみさんでしょうし、幽霊もそれぞれ違う姿をしているはず。倍速で情報を詰め込むことも必要なかもしれませんが、子どもの頃こそ、その子の心に自発的に映像が立ち上がってくるまでの、余白の時間も大切にしてほしいと思います。

彼らのなかで登場人物が生き生きと動き出し、心に残るからこそ、描かれていない部分が気になってくることもあるわけです。例えば「もし、自分がおかみさんの立場だったら？」「この悪役官は嫌なやつだけど、何か事情があるのかも？」と。表面に現れていることだけじゃなく、裏側に思いを馳せる想像力が「他者を思いやる」ことの根っこにつながっている気がします。

表現者への扉を開いた恩師の言葉

今でこそ皆様の前で漸をさせていただいていますが、子どもの頃は内気で人前に入るのが苦手でした。母が太陽のように明るい人だったので「私はお母さんみたいにはなれない」と心のどこかで思っていました。けれども「一歩踏み出してみたい」という思いもあって、鬱屈した感情を抱えていました。そんな小学5年生のある日のこと、担任の先生が「演劇クラブを作ろうから一緒にやらない？」と声をかけてくれたのです。そこから人前で表現す

ることの楽しさを知り、演劇にのめりこんでいきました。落語との出会いは、大学入学時に落語研究会に勧誘されたのがきっかけです。「うちはコントとか演劇に近いことを主にやっているから」という言葉を真に受けて入ったのですが、ふたを開けてみれば古典落語に真剣に向き合うサークルで、コントはほとんどやっていませんでした（笑）。でも、そこから落語に目覚め、落語家になっっているのだから人生っておもしろいな、と思います。

実は、落語家への道を後押ししてくれたのは母なのです。落語家になりたいう気持ちはあったのですが、現実を見て就職すべきかと悩んでいたところ「やりたいことが見つかったのなら、飛び込んだほうがいい」と。

その後、弟子入りさせていただいた師匠、林家正蔵も「頭でっかちにならず、柔軟に挑戦してみて」と常に言ってくれたので、その言葉があった

たからこそ落語の裏側を描いてみる、という挑戦ができたのだと思います。

子どもたちの背中を押す存在に

学校では「最後に一言お願いします」と言われることが多いのですが、「やりたいことがあったら、挑戦してみてほしい」「不安な気持ちになったら、つるちゃんを思い出してね！」と子どもたちに呼びかけています。私自身、担任の先生や母、師匠からの後押しをいただけて、ここまでやってこれました。だからこそ、子どもたちの背中を押してあげられる存在でありたいし、私自身も挑戦する人であり続けたいと思っています。先生がたも、子どものやる気を「それいいね」「やってみなよ」と応援してあげてほしいなと思います。責任の重いお仕事で大変だとは思いますが、疲れたときには、ぜひ寄席に笑いに来てください。先生がたが笑っていると、子どもたちもきつと、笑顔になるはずですよ！



PROFILE

中央大学卒業。2010年に林家正蔵師匠に弟子入り。古典落語や現代を舞台にした新作落語に取り組む一方で、古典落語の名作「子別れ」「芝浜」「紺屋高尾」の登場人物であるおかみさんや遊女を主人公にして、その視点から落語を描く挑戦を行い大きな話題を呼ぶ。2024年に女性初の12人抜き抜擢で真打に昇進。寄席やホール、テレビ、ラジオで活躍するほか、企業や学校での講演活動も行う。2026年12月1～10日まで上野鈴木本演芸場夜の部にて主任興行開催予定。林家つる子 web サイト <https://tsuruko.jp>

生徒の健全育成につながる 部活動地域展開における 指導者の育成



至学館大学 健康科学部
こども健康・教育学科 教授
鈴木 達見

ポイント

- ①多くの自治体において部活動地域展開が始まり、課題が明確化された
- ②自治体の方針によって課題は違うが、指導者の確保と育成は必須である
- ③指導者は今まで以上に子どもに寄り添い、よき理解者となってほしい

はじめに

私が所属している至学館大学アスレティック・デパートメント（以下AD）では、トレーニング方法、けがの予防や対処、心理面等について、それぞれの専門の先生がたがアスリートをサポートしている。また、アスリートを科学的にもサポートするためのアプリ（SAIASS…サイアス）を開発している。種目ごとに収集するデータは異なるが、コーチへのヒアリングを十分に行い、本学オリジナルで設計をし、できうる限りの要望に応え、開発している。

さらに、スポーツを通じた地域連携として中学校の部活動とも関わりをもってきた。私自身が愛知県大府市教育委員会での勤務時、部活動指導員制

度の導入など地域との連携を推進した経緯もあり、令和6年度よりコーディネーターとして中学校部活動地域展開に関わることとなった。

これらの活動を行ううえで、主軸に置こうと考えたのは、「生徒にスポーツのすばらしさや楽しさを感じてもらいたい」ということである。

部活動地域展開における課題と、大府市の部活動地域展開

さて、文部科学省の「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」（R7・12）によると、地域展開の円滑な推進に当たっての対応が図（右下）のように示されている。

Ⅲ 地域展開の円滑な推進に当たっての対応

- 1 推進体制の整備
 - (1) 地方公共団体における体制整備
 - (2) 国・都道府県・市区町村等・地域クラブ活動の運営団体・実施主体の役割分担
 - (3) 地域クラブ活動の運営団体・実施主体による生徒が所属する中学校等との連携
 - (4) 関係団体等・大学・民間企業との連携
- 2 各種課題への対応
 - (1) 運営団体・実施主体の整備等
 - (2) 指導者の確保・育成
 - (3) 活動場所の確保
 - (4) 活動場所への移動手段の確保
 - (5) 生徒の安全・安心の確保
 - (6) 障害のある生徒の活動機会の確保
- 3 生徒のニーズの反映及び地域クラブ活動への参画促進等

●「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」（R7.12）より抜粋

そこでは、「各種課題への対応」にもふれられており、さまざまな事例が記されている。それらの内容と大府市の部活動地域展開を照らし合わせてみる。大府市では、地域の特性を生かし、部活動の種目にないものも積極的に取り入れていこうと考えているが、部活動の延長を基本としている。そのため、活動場所や移動手段の確保等については、自治体によって差異はあるものの、大きな課題として残っているものではない。ただ、指導者の確保・育成は当初からの大きな課題である。

そこで、大府市は指導者の確保のために、教員の兼職・兼業を認めたり、愛知県の人材バンクを活用して、新たな指導者を募集したりし、必要な指導者の確保をしてきた。次に行うべきことは、指導者の育成である。地域の指導者の不適切な言動がメディア等で報道されることもあるが、これらは、「学ぶ機会」が少なかったことにも起因すると考えている。そこで、大府市との協議の末、育成・研修部門を本学ADが担い、それぞれの教員の専門性を生かした研修を行うこととなった。

指導者への研修会、動画、そして大会運営へ

令和7年度末、大府市が認定しているクラブ数はおよそ50クラブで、生徒の加盟率は対象生徒の9割、指導者登録数は154名である。その指導者のかたがたはADが主催する研修会に参加し、修了証を付与されており、これが指導するための必要条件となっている。効果測定の感想において、「ハラスメントという範囲の大きさに気づくことができた」「無理なトレーニングは、けがにつながることはわかっていたつもりでも、改めて科学的な根拠を聞くことで、再確認することができた」「危機管理の基本を再認識できた」など、一定の効果が認められたが、全

員がその研修会に参加することはできなかった。そこで、大府市と今後について協議し進めてきたのは、研修と同じ内容の動画を作成することであり、市が設定した日時に指導者に動画を視聴してもらう研修を行うこととした。次の表が動画の一覧である。

動画のラインナップ

安全と危機管理

1. 熱中症の予防と対策 ★
ー現場で“迷わない”ための観察と判断ー 14分12秒
2. けがの対応や応急処置 ★ 28分17秒
3. 安全管理
(事故防止について) ★ 20分05秒

指導スキル・マインド

4. やる気を引き出す言葉かけ
(声かけのスキル) ★ 21分38秒
5. 小・中学校の体育学習の内容 22分31秒
6. 子どもたちのよき伴走者となるために
(指導者としての在り方) 31分51秒
7. 子どもたちとの信頼関係の構築 ★
(カウンセリングマインド) 24分21秒

スポーツ科学・医学

8. 子どもの発育・発達にあわせた指導法 ★
ー体力・体格の発達と学習の適時性についてー 13分08秒
9. トレーニングの原理・原則 ★ 18分57秒
10. みんなで月経について考えてみませんか? ★ 36分20秒
11. スポーツをする子どもたちの健康と未来を守る ★
(アンチドーピング) 24分00秒

コンプライアンス・連携

12. 指導者の職務と注意義務 31分43秒
13. スポーツ指導における
ハラスメントの理解と防止 ★ 23分24秒
14. 保護者への対応
(よりよい連携のために) ★ 24分47秒

★マークの動画には「確認テスト」が付きます。

今回の動画シリーズの制作意図は、「教育的資質」を重視し、技術指導の向上だけではなく、指導者が生徒一人一人のよき理解者として寄り添うことの重要性を伝えることにある。技術的な指導は得意なかたでも、昔ながらの勝利至上主義であったり、スパルタ的な対応をされたりするかたは少なからずいる。私が中学校の校長時代に外部の指導者と保護者が揉めることがあ

り、その仲介に入っても、なかなか指導者のかたに理解してもらえなかったときもあった。こうした経験を踏まえ、思春期の生徒、そして、生徒を支える保護者とコミュニケーションをとり、気持ちを理解することの大切さなど、適切な「生徒との関係性」を築くため

る。

おわりに

私は教員時代、卓球部の顧問であった。全国大会等の大きな大会を目ざすなど、今思えば、どこかで、勝利至上主義的な部分もあったのではないかと振り返ることもある。しかし、1学年で30人程度の部員がいた中で、根幹としてもっていたものは、「卓球というスポーツのすばらしさや楽しさを知ってもらいたい」という想いである。そのために必要なものは何か。当時から大切にしていたことは、「生徒に寄り添う」ことである。

しかし、今、考えると、「寄り添う」の意味が、当時と現在では少し違っていると感じられる。当時は、礼儀や技術を教えることがメインで、それらについて、話し合う程度にしか考えていなかった。今は、技術よりも部員個々の状況を理解・把握し、一人一人に合ったスポーツについての「確かな知識と最新情報」を伝えながら、話し合い、最適解をみつけないことではないかと考えている。

教員も含め地域の指導者のかたがたにはぜひとも、生徒のよき理解者となり、引き続き、寄り添っていただくことを期待し、本動画がその一助となればと思っている。

子どもの学びを深める デジタルと手書き(紙)の 最適な活用



北海道釧路市立中央小学校
校長 小川 一法

ポイント

- ① 学習の目的に応じて「デジタルと手書き(紙)」を最適に使い分ける授業づくりを進める
- ② 学校全体で活用の考え方を共有し、各教科等の特性を踏まえた授業改善につなげる
- ③ 子ども自身が自らに合った学び方を選択し、主体的に学び続ける力を育むことを目指す

「デジタルか紙か」ではなく、 学びに最適な選択を

GIGAスクール構想により、一人一台端末は学校教育に欠かせない学習ツールとなった。学習指導要領においても、情報活用能力は言語能力と並び「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけられており、ICTを日常的に活用した授業づくりが求められている。さらに生成AIの登場により、子どもたちがデジタルを活用する場面は、今後ますます広がるのが予想される。

一方で、「画面入力ばかりで書く力が身につかなくなっている」「ノートでじっくり考える時間が減っている」といった声も聞かれる。しかし、本校ではその問いを「デジタルか紙か」と

デジタルと手書きの 互いの強みを生かす

これからの授業づくりで重要なのは、両者を互いのよさや弱点を補い合う「相互補完」の関係として捉え、学習の目的に応じて適切に組み合わせることである。

デジタルには、情報検索の速さや資料の保存・共有、編集の容易さなど、多くの利点がある。クラウド環境を活用すれば、一人一人の考えを瞬時に共有し、互いの考えを比較・関連づける

がら、自らの考えを更新し深めることができる。まさに学びの可能性を広げる強力なツールと言える。

一方で、手書き(紙)にもデジタルには代えがたい価値がある。手で書くことは単なる記録ではなく、情報を取捨選択し、整理・構造化し、自分の言葉で表現する高度な思考の過程である。考えを整理したり、学習内容を振り返ったりする場面では、紙に書くことで一層思考が深まることが多い。

手で書く活動の具体例として、本校で長年にわたり継続して取り組んでいる「中央小検定」を紹介したい。この検定では、学年の発達段階に応じて漢字の読み書きやアルファベット、四則計算、都道府県、音読、試写(現在は内容を一部変更して実施)など、基礎的・基本的な内容を繰り返し学習している。

この取組の目的は、知識や技能の定着だけではない。合格に向けて繰り返し練習を重ねる中で、「努力すればできるようになる」という実感を積み重ね、最後まで粘り強く挑戦する態度や自己肯定感を育むことも大切にしている。手で書くことや声に出して読むことを継続することで、学びの土台となる基礎的・基本的な力を着実に育てている。

このように、本校ではデジタルと手書き(紙)を対立して捉えるのではなく

く、各ツールが果たす役割や特性を踏まえて、効果的に組み合わせることが授業づくりの土台となっている。

学びを深めるデジタルと手書きの往還

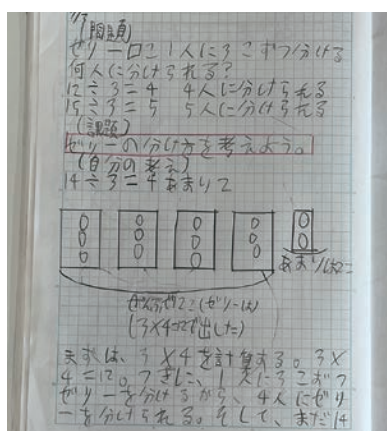
各教科等においても、学習の目的や内容に応じて、デジタルと手書き（紙）を往還する授業づくりを進めている。

3年生の国語における「川をつなぐちえ」の学習では、教科書の文章はもとより図や写真からも情報を読み取り、それらを結びつけて内容を理解することをねらいとした。そこで、教師が教科書の文章を、意味のまとまりや区切りごとに分けてタブレットに提示し、子どもたちが図や写真と対応づけながら並べ替える活動を取り入れた。子どもたちは、接続詞や文のつながりを手がかりに、「この文章はこの図と結びつく」と考えながら情報を整理していった。

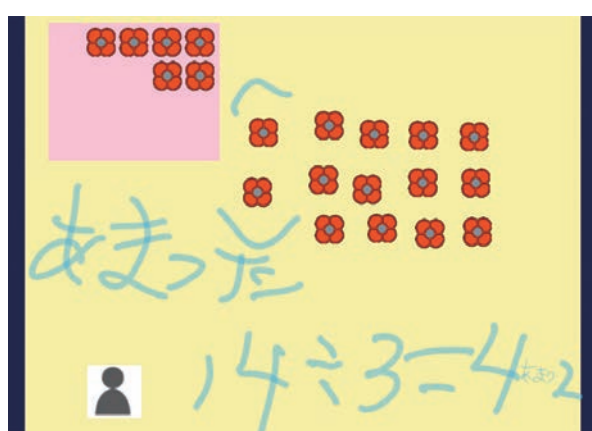
学習の最後には、ノートに「図や写真だけではわからないことも、文章と合わせて読むことでよくわかった」とまとめる児童も見られた。デジタルで情報を整理し、手書きで学びを言語化することで、理解が一層深まったと感じている。

算数（専科指導）でも、学習内容に応じてデジタルと手書きを使い分けている。3年生の「わり算」の学習では、画面上ではじきを操作できる教材を

タブレット内に準備し、 $14 \div 3$ のあまりのあるわり算の考え方を視覚的に捉えられるようにした。子どもたちは操作の様子を録画して共有し、自分の考え方を説明した。その後、説明をタブレットにまとめるかノートにまとめるかは子ども自身が選択し、ノートを選んだ児童は写真に撮って共有した。



●紙への手書きを選択した児童のノート



●タブレット画面でまとめた例

互いの考えを比較した後は、学んだことやわかったことをノートに整理し、適用問題に取り組んだ。子どもたちからは「いろいろな考え方がわかった」「おはじきを動かしたことで理解しやすかった」といった感想が聞かれ、デジタルによる操作活動の可視化や手書きによる思考の整理など、それぞれの有効性が見られた。

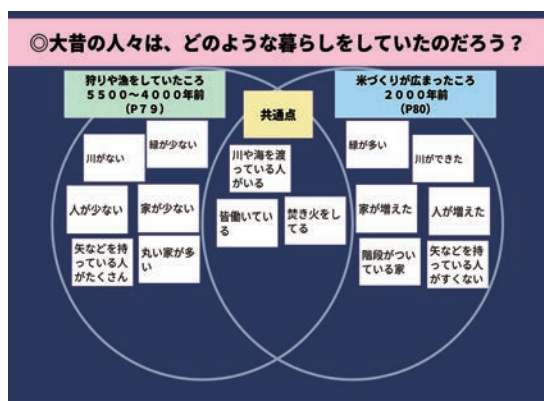
他の教科等においても、それぞれの教科の特性を踏まえながら、デジタルと手書きのバランスを模索しながら授業づくりを進めている。特に本校では、ベン図やYチャートなどの思考ツールも学習場面に応じて積極的に活用している。グループで考えを共有したり共同編集したりする場面ではタブレットを活用し、一人でじっくり比較・分類・関連づけを行う場面では紙に手書きするなど、学習活動に応じて柔軟に使い分けている。

学び方を自ら選ぶ子どもを育てる

こうした実践を積み重ねる中で、子どもたちからは、「紙に書くと考えが整理しやすい」「友達と意見を共有するならタブレットが便利」といった声が聞かれるようになった。学習の目的に応じて、自らに合った学び方を選ぼうとする姿も少しずつ見られるようになってきている。

今後、生成AIのさらなる進歩な

ど、どれほど技術が発展しても、学びの主体は子どもであることに変わりはない。だからこそ学校には、端末を操作する力だけでなく「この学習にはどの方法が最も適しているだろう」と自ら問いかけ、自分に合った学び方を主体的に選択し、活用できる力を育てることが求められる。



●社会科の授業では、ベン図を用いて思考を深めた

本校の取組は、決して特別なものではない。「子どもの学びにとって最適なのは何か」という問いを教職員が共有し、小さな実践と工夫を積み重ねてきた結果である。これからも、デジタルと手書き（紙）のそれぞれのよさを生かしながら、子どもが主体的に学び、多様な他者と協働し、自ら学び方を選択できる力を育む学校づくりを進めていきたい。

むなかた子ども大学四つの取組



むなかた子ども大学の挑戦 ～本物から学ぶ。本物を体験する。～ 地域総がかりで育む子どもたちの走り

メインキャンパス



- 職業・技能に係る講座を企業等と連携し展開
- 約25の講座を同時開催
- 一つの講座を選択し、深く学ぶ(約4時間)

特設講座

特設講座



- 事業者施設等(市外含む)で開催
- 職業・技能に係る講座を一つ展開(約2時間)

むなかた子ども大学の日



- 市内全小学校で開催
- 各小学校が主体
- 保護者・企業・地域等との協働による体験・学習

夏の課外授業



- 市内外問わず小・中学生が参加可能
- 事業者・団体が主体
- 約70の講座を期間中に順次展開

子どもたちの社会との つながりを取り戻す

福岡県宗像市では、キャリア教育事業として「むなかた子ども大学」を展開しています。

コロナ禍により、地域行事や体験活動、企業見学など、子どもたちが学校外で社会と関わる機会が大きく減少しました。地域の大人と出会い、多様な価値観や生き方にふれる機会が失われたことで、自分の将来や社会との関わりについて考える場も少なくなっていました。

こうした状況を受け、「教育のまち宗像」として、子どもたちと社会とのつながりを取り戻し、未来への視野を広げる学びの場を創出したいとの思いからスタートしたのが「むなかた子ども大学」です。

本物との出会いが 志を育む

むなかた子ども大学は、大学や企業、地域団体などの専門家を講師として迎え、多様な学びと体験の機会を提供するキャリア教育事業です。

本事業では、文科省の「小学校キャリア教育の手引き」で示されている「基礎的・汎用的能力」の中でも、特に「キャリアプランニング能力」の育成を重視しています。「本物との出会い」を通して、働くことの意味や社会における役割を理解し、自らの将来について主体的に考える力を育むことを目指し、教育関係者、企業、地域団体、市民行政が連携した「地域総がかりの教育」を進めています。むなかた子ども大学では、年間を通じてさまざまな学びと体験の機会を創出しています。市内にあるスポーツ・文化施設「グローバルアリーナ」で開催する「メインキャンパス」では、小中学生を対象に約25の職業講座を同時開催し、毎年約400人の子どもたちが参加しています。また、「特設講座」では海上保安官や警察官などの職場を訪問し、現場で働く人々から直接話を聞くことができます。「夏の課外授業」では、地域団体や市民活動団体と連携し、市内各地で約70講座を開催。さらに、市立小学校で実施する「子ども大学の日」では、

キャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」

——— 主に学校教育において育成 ———

人間関係形成・社会形成能力

自己理解・自己管理能力

課題対応能力



むなかた子ども大学

の取組をととして育成

キャリアプランニング能力

働くこと・人の理解

社会的役割と意義

将来設計

■参考資料：小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉

地域の力が 子どもたちを育てる

こうした取組を支えているのが、宗像市ならではの豊かな地域資源です。

地域住民や保護者が講師となり、それぞれの仕事や生き方を子どもたちに伝えていきます。

**地域総がかりで
未来への志を育む**

むなかた子ども大学は、単なる職業体験事業ではありません。子どもたちが「どのよう^{いどう}に生きていきたいのか」「どのように社会に貢献したいのか」を考え、自らの志を育む教育の場です。変化が激しく、将来の予測が難しい時代だからこそ、子どもたちには知識や技能だ

けだけでなく、自ら考え、挑戦し、未来を切り拓く力が求められています。その力は、学校だけではなく、地域の大人たちとの関わりの中で育まれるものでもあります。

市内には福岡教育大学や日本赤十字九州国際看護大学が立地し、古くから教育を大切にしてきた風土があります。さらに、出光佐三^{いみつさくさぶ}の出身地としても知られ、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群といった世界文化遺産を有するなど、歴史や文化、人のつながりにも恵まれています。参加した子どもたちからは、「見える仕事だけでなく、それを支える仕事があることを知った」「父の仕事の大変さがわかった。ありがとうと言いたい」といった声が寄せられています。職業への関心だけでなく、働く人への敬意や感謝の気持ちも育まれていることがうかがえます。

一方、講師を務めた企業や団体の関係者からも、「仕事の価値や社会的意義を改めて考える機会になった」といった声が聞かれます。子どもだけでなく大人にとっても学びと成長の機会となり、地域全体の教育力向上につながっています。



宗像市教育委員会
猿楽 隆司 教育長

宗像市では、小中一貫教育による9年間の「縦のつながり」と、コミュニティ・スクールによる地域・家庭との「横のつながり」を生かした「小中一貫コミュニティ・スクール」を推進し、地域全体で子どもたちの学びと成長を支える教育を展開しています。「むなかた子ども大学」は、その小中一貫コミュニティ・スクールの特色を生かした取組の一つです。学校・家庭・地域・企業・大学など多様な主体が連携し、地域ならではの教育資源を活用した本物の体験や学びを提供することで、学校の枠を超えた学びの場を創出しています。

こうした地域ぐるみの学びを通して、子どもたちが自らの可能性を広げ、将来への夢や目標を描き、志を育むことを目指しています。



■優秀賞■
むなかた子ども大学
福岡県宗像市教育委員会

■本事業は、第13回「キャリア教育推進連携表彰」最優秀賞(上)と、第4回「GR_官民連携アワード」優秀賞(下)を受賞しました。

多様な学びと出会いの機会を創出していきます。未来を担う子どもたちが、自らの可能性を信じ、志をもって挑戦できる社会をつくること。そのために、地域全体で子どもたちの成長を支え続けていきます。それが、「むなかた子ども大学」に込められた宗像市の願いです。

宗像市はこれからも、「誰もが楽しく学び、幸せや生きがいを感じ、活躍できるまち宗像」という理念のもと、



「つながり」の中で育つ 上瀬谷の子どもたち



↑「GREEN × EXPO 2027」の会場前に、まちの人たちと花植え活動を行う2年生たち

「上瀬谷ならではの」学び

本校では、生活科、総合的な学習の時間を重点的に取り組む教科として設定し、「体験による生きた知の習得と活用を通して豊かな生き方を目指す子の育成」をテーマに取り組んでいます。子どもたちの身近な疑問や発見、驚きから学習を展開し、その中で出会うまちの人の活動を大切にしています。活動を通して必要感のある「生きた知」を得てそれを活用すること、自分たちの想いや活動が認められ、まちの人に喜ばれること、自分自身がまちの大切な一員であることを自覚することが、子どもたちのこれからの生き方につながっていくと考えています。

また、「幼稚園・保育園での育ち」を踏まえた「小学校での育ち」そして「中学・高校やその後の育ち」という「育ちのつながり」を俯瞰して捉え「上瀬谷ならではの」「人」「もの」「こと」に目を向け学習を創ること。これも本校で大切にしていることです。

神奈川県横浜市立上瀬谷小学校

主幹教諭 片山 圭祐

主幹教諭 中武 仁美

まちのかたと協働し深い学びにつながるものは「定番のカリキュラム」として引き継ぎつつ、その年その年で展開を工夫しながら、まちにあふれる魅力を生かした単元づくりに挑戦しています。その一部をご紹介します。

育ちのつながり、多様な立場のかたとのつながり

同市内の「中屋敷保育園」と連携し、幼保小連携推進地区として3年めを迎えた本校では、1年生は年長のときから関わっている6年生のバディに案内され入学式を迎えます。学校生活が始まると、出向いてきた保育士に読み聞かせをしてもらったり、保育園の園児を招いて生活科の学習を一緒にしたりしながら、1年生が小学校生活を滑らかにスタートさせられる工夫をしています。

5年生は学校・福祉・農業・商業が連携して行う「YOKOHAMA SEYAGAPA祭り」へ参加しています。瀬



↑ 給食調理時の野菜の皮を利用した堆肥作りに取り組み、その堆肥で花苗を育て、まちの人にプレゼントする4年生たち



↑ 3年生は国語の学習と関連させながら、まちの魅力をかたにし、地域のかたがたとともに楽しんだ



↑ 「ガバオ祭り」周知のため、「ブンブン音頭」を踊ったり、チラシを配ったりする子どもたちの様子



↑ 「フラワーロードプロジェクト」では、小中高校生、まちのかたがたとともに花植え活動を行った。夏季は除草などのお手入れも

谷区で養蜂をしている「一般社団法人セヤマミツラボ」のハチミツ、近隣の特別支援学校、福祉施設が育てるニンニクやガバオ（ホーリーバジル）や野菜など、まちの食材を使った料理をお店で提供してもらう取組です。「神奈川県立瀬谷支援学校」でニンニクの植えつけや収穫の体験をし、メニュー開発に携わったり、ポスターを制作するなどの広報活動を行ったりもします。まちの人の熱い想いを知ること、自分たちが頼りにされること、自分たちが考えた取組でまちの役に立つことなど、子どもたちはたくさんの成果とやりがいを感じています。

また「神奈川県立横浜瀬谷高校」主催の「フラワーロードプロジェクト」にも参加しています。「GREEN × EXPO 2027」会場につながる道路の花壇に花を植える活動を通して、地域のつながりを広げ、機運醸成を図る活動で、関連企業、行政、近隣団体、地域住民も参加するものです。

まだまだある！ まちの魅力「GREEN × EXPO 2027」を通して世界とのつながりを

上瀬谷のまちは養蚕で栄えた歴史があり、史跡も残されています。昨年度、蚕を育てた4年生たちはその魅力を発信する取組を始めています。

また、昔は盛んに栽培されていた小麦や、「かながわブランド」に登録されている「横浜瀬谷うどん」、かつては地域になかったイチゴやアスパラガスなど、地元産の野菜作りに取り組む農家のかたがたと3年生の社会科で関わり、独自の学習を展開しています。

そしてなんとこれも花！ 6年生はロスフラワーなどを押し花として活用できないか試行錯誤し、1年生の紙すき作品と一緒に会場を彩るオブジェを創る……など考えています。

「GREEN × EXPO 2027」会場から歩いて5分、校舎から会場が見える立地を生かし、まちの変化や新しい取組を学習と結びつけようと奮闘しています。これまでの学習のつながりを大切にしながら新しい取組はできないか、またその成果を世界に向けて発信できないか、模索の日々が続いています。



↑ 6年生がかつて寺子屋だった「妙光寺」でまちの歴史について教えてもらう「おらがまち」の取組

千葉

未来を拓く学びの場としての メディアセンター

～多様な学びを支える学校図書館の進化～

浦安市教育委員会 指導主事 大城戸 優也

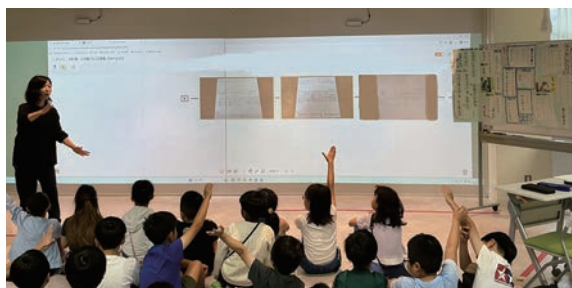
GIGA スクール構想による、一人一台端末の活用が進む現在、本市では、情報活用能力育成の一層の充実を目ざし、小学校を中心に学校図書館のメディアセンター化を進めています。メディアセンターとは、学校図書館における「紙の情報収集機能」と、パソコン室などの ICT 環境における「電子の情報収集機能」を併せもち、児童がさまざまな情報を効果的に活用できる教室のことです。

メディアセンターは、単なる書籍の貸し出しや閲覧の場、各教科の調べ学習に留まらず、ICT 機器を活用した児童の主体的・対話的な学びを支援する拠点として、重要な役割を担っています。壁一面に広がる大型画面や、複数台のプロジェクターなどの機器を配備し、多様な学習スタイルに対応可能な環境を整え、これにより児童は調べ学習や意見交換、作品発表など、これまで以上に深い学びや表現が可能になります。また、一人一台端末を用いることで、デジタル資料やオンライン情報の活用も進み、児童の学習の幅が広がることが期待できます。

例えば、児童がグループで交流した内容を大型画面で映し出すことで、視覚的にも情報を共有しながら発表や意見交換を行う授業を展開しています。また、他校とオンラインで画面を共有し、プレゼンテーション活動を互に行うことで、表現力や協働性の向上につながっている事例もあります。メディアセンターの機能を積極的に活用した授業を行うことで、一人一人の理解度や興味・関心に応じたきめ細やかな指導にもつながっています。

市では、今年度末までに小学校全 17 校に設置し、メディアセンターを単なる「情報収集の場所」ではなく、これからの新しい学びのスタイルを創出する重要な拠点として、積極的な活用を推進していきます。

「浦安の子どもたちが 20 年後、30 年後も幸せであるために」を合い言葉に、未来を拓く学びの場として、児童が自ら考え、発信し、協働できる学習環境の充実に努めていくとともに、メディアセンターの活用を進めてまいります。



全国各地のさまざまな取組を紹介します。

北海道

好奇心・探究心を育む 総合学習と 笑顔あふれる学校づくり

稚内市立富磯小学校 校長 三原 美和子

富磯小学校では、総合学習の一環として、「サケの飼育と放流」に取り組んでいる。本校は、漁師の家庭に育つ児童が多い。保護者や地域の「海や漁師の仕事に興味をもってほしい」という願いから始まった学習は、38 年にわたり継続している。

サケは川で生まれ、3～5 年かけて数千 km の海を回遊し生まれた川へ戻ってくる。その一生を、児童が飼育や観察を通して学び、「生命の尊さ」や「自然を愛する心」を育んでいる。

今年度は、4 月 16 日に放流を行った。昨年 12 月に、“中頓別町サケ・マス孵化場”より 3,000 粒の卵を譲り受け、7℃に保った水槽で飼育を開始した。約 1 週間で孵化し、腹部に「さいのう」という栄養袋を付けた赤ちゃんが誕生する。児童は毎日の変化を記録し、餌やりや水替えなどの世話を、全校で協力して行ってきた。

放流の日には、「サケの赤ちゃんとお別れ式」を実施し、学年の発達段階に応じて、観察記録を絵や文章で表したり、お別れの手紙を書いたりして学習をまとめた。保護者や地域のかたがたも激励に訪れ、体長 4～5 cm に成長した 2,500 匹の稚魚を、児童はカップに入れて優しく放していった。「大きく育て帰ってきてね」と願いをこめ、海を目ざして元気に泳いで行くサケの稚魚たちを見送った。

秋に、富磯の川に戻って来るサケの数は、その年の天候等により異なる。多い年は 20 匹以上のサケが戻って来たが、ここ数年は激減している。地球温暖化が関係しているようだが、確かなことはわかっていない。今年は、どれくらいのサケが戻って来るだろうか。多くのサケが帰ってくることを期待し過ごす毎日である。

これらの学習を通して、児童の好奇心や探究心、主体的に学ぶ力を育てたい。そして、学校目標の「心身ともに 健やかで たくましい子の育成」を柱に、子どもたちが目を輝かせ、生き生きと学習に向かう、笑顔があふれる学校を創るために、日々、努力していきたい。



広島

日本語初期指導教室がつなぐ 学びの第一歩

東広島市教育委員会 学校教育部
指導課 指導主事

木村 真之

東広島市は広島県の中央に位置し、大学や先端企業が集積する国際学術研究都市です。外国人市民の割合は5%を超え、日本語指導を必要とする児童生徒も増加しています。こうした状況を背景に、本市では外国につながる児童生徒が安心して学び、成長できる環境づくりに継続的に取り組んでおり、日本語初期指導教室はその施策の一つです。

日本語初期指導教室では、来日直後の児童生徒を対象に、学校編入前の概ね4週間、あいさつや文字、日本の学校生活や授業中のきまりなどを個別に指導し、日本での生活や学校生活に必要な力を育むことで、円滑に学校生活をスタートできるよう支援しています。

あわせて、保護者や学校との連絡・調整を担うコーディネーターを配置し、編入準備を支援するとともに、教室での指導内容や日本語の習得状況をまとめた個別の指導計画を学校へ引き継ぐことで、編入後の切れ目のない支援につなげています。

短期間ではありますが、子どもたちは大きく成長します。来室当初はとまどいを見せていた子どもも、あいさつや簡単な日本語を使えるようになるなど、できることが着実に増えていきます。そして、新しい環境への不安を少しずつ自信へと変えながら、学校生活への期待を膨らませていきます。

本市において、外国につながる児童生徒は今後も増加が見込まれ、その国籍や文化的背景も一層多様化すると考えられます。一方で、子どもたちの「学びたい」という思いは世界共通です。多文化共生の学校づくりが求められる中、日本語初期指導教室の役割はますます重要になります。子どもたちの日本での学びの第一歩を大切にしながら、その後の学校生活を支える支援・指導体制の充実を図り、一人一人が自らの可能性を伸ばしていけるよう取り組んでいきます。



日本語初期指導教室の様子

神奈川

「教育課程柔軟化」から 見える希望の^{あかり}燈

神奈川県教育委員会 中教育事務所 所長 内藤 公彦

教師と子ども双方に「余白」を創出し、豊かな学びにつなげる。このようなワードが中央教育審議会から示され、次期学習指導要領の検討が行われていることは、日本の教育において大きな転換であり、私たち教師にとって大きなチャンスであると思います。

令和6年度、当時小学校長であった私は、子どもたちの多様性を生かすために「チーム担任制」を本格的に導入するなど、インクルーシブな学校づくりを推進していましたが、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が進んでいないことを本校の課題として捉えていました。

そのような中、40分授業午前5時間制を実施している目黒区の研究開発学校の実践を知り、新たな教育課程の創造こそが、今の子どもたちが必要としている質の高い、深い学びの実現へとつながる授業改善への起爆剤となるのではという考えに至りました。

これまで45分で行っていた授業内容を40分で行うためには、指導内容の精選・重点化を図り、一人一台端末を活用することも必要となり、必然的に授業改善が促されます。さらに、令和7年度には授業時数特例校を申請し、生み出した時間で創意ある教育課程の編成を推進することとしました。

私は学校を離れましたが、現場はしっかりと自走しています。学びに主体性、柔軟性が生まれ、何より授業を楽しみにする子どもたちが増えたという報告には思わず笑みがこぼれます。

令和7年度には授業時数特例校が1校のみであった神奈川県においても、令和8年度は33校が「教育課程サキドリ研究校」として創造的な教育課程の実践研究に取り組んでいます。教師も子どもたちも毎日行くのが楽しみでならない学校づくりが進み、学校教育が再び輝きを取り戻す。そんな希望の燈を確かなものにしていくことこそが、今、私たちに求められていることなのではないでしょうか。



生み出した時間で実践した2年生・生活科の学習風景。
テーマ「身近な地域を深く掘り下げ、知識を経験へと変える」

10代の読者に向けた本づくり ～ 岩波ジュニア新書の取組 ～



岩波書店ジュニア新書
ジュニアスタートブックス編集長 須藤 建

学校図書館に見る格差

前回は「出張読書会」という試みをご紹介しました。岩波ジュニア新書編集部の編集部員が、中学校や高校を訪問し、生徒の皆さんと一緒に読書会を行うという活動です。ジュニア新書や、そもそも「新書」というものを知ってもらいための活動であり、刊行した本の反応を知るうえでも、企画を考えるうえでも、非常に参考になっています。

さまざまな学校を訪れて感じるのには、学校によって読書環境にかなりの差があることです。もちろんいずれの学校も熱心な司書のかたがいらっしゃるので、図書館での展示や、日々の読書活動などは充実していることがうかがえます。ただそれでも、そもそもの図書館の広さや蔵書数、図書館司書の数、置いてくださっている新刊の数は、自治体によって、あるいは私立・公立の違いによってはっきりとした差があります。書店数も激減しているなか、日々忙しい中学生や高校生にとって、学校図書館は本と出会う貴重な場だといえますが、そこにこのような差が生まれてよいのか……ということをよく考えます。

インターネット、AI時代において紙の本だからできること

もちろん本だけが情報を得る手段ではありません。むしろこれだけ情報環境が発達した現代では、知りたいことがあれば、まずインターネットで検索するか、AIにたずねるのが今や一般的でしょう。情報は無料で、しかも膨大に溢れています。「本という古くて遅いメディアにふれたほうがよい理由がどこにあるのか？」そう思うかたも多い

らっしゃるかもしれません。

ただ、私は本というメディアの利点はあると思っています。この5月に『旅して学ぶ台湾』というジュニア新書を刊行しました。先史時代から現代までの歴史を、台湾を中心にした視点で伝える内容で、歴史に関連したスポット紹介や、旅のおすすめコースも掲載しています。修学旅行の事前・事後学習や、観光やビジネスで台湾を訪れるかたに読んでほしいと思って編集をしました。

試みに「台湾の歴史」でインターネットを検索すると、さまざまな記事や動画がたくさん出てきます。ただそれらの情報が、誰がどの立場でどういう意図をもって作成したものなのか、見極めるのはなかなか大変です。また中には正しくない情報が混じっているものもあり、それを検証するのも一苦労です。

『旅して学ぶ台湾』は、新書という200ページ前後の限られた紙幅のなかで「台湾の歴史」を紹介しています。日本の歴史に置き換えて考えてみるとかなり無茶な試みで、何が伝えるべき出来事なのかをぎりぎりまで精査して、そのうえで大掴みに、しかも正確に書くことが求められます。この困難な仕事に5人の研究者のかたが挑んでくださったのですが、研究者の知見というフィルターを通して情報の取捨選択を行うことは、大きな意味があると私は思いました。さらに校正のプロセスを通して内容を磨くことができるのも本づくりのメリットです。

この「専門家の知見を、一般のかたに向けて開き、内容の正確性を保ちながら、わかりやすく伝える」という部分こそが、本というメディアが大切にしてきた価値であり、そこにはまだ一日の長

があるのではないかと。同じ内容のものをウェブサイトで公開してもよいのですが、200ページ分の情報をモニターやデバイスで読むのは大変です。紙というフォーマットに落とし込んでこそ得られる、携帯性や可読性があると私は思います。

これからの出版社に求められるのは書籍に出会うチャネルを増やすこと

中高生は、そもそも「新書」に出会いにくくなっています。書店の数が減り、図書館に置かれていた本が限られているとしたら、動画やSNSなど、彼らが日常的にふれ、情報を摂取している場所に、本をもっと存在させていかねばならない。そのためにもこういう試みをするのが、今後のジュニア新書に問われていることだと思います。



岩波ジュニア新書

「旅して学ぶ台湾」

（赤松美和子、洪郁如、胎中千鶴、山崎直也、劉彦甫）

須藤 建 (SUDO Takanu)

1979年神奈川県生まれ。大学卒業後、台湾留学、高校での教員補助などを経て、2005年岩波書店入社。電子出版編集部、児童書編集部、単行本編集部を経て、ジュニア新書編集部へ。2013年1月に10代向けの海外文学シリーズ「STAMP BOOKS」を創刊。2024年10月から岩波ジュニア新書、岩波ジュニアスタートブックス編集長。

ことばの教育・ことばと教育



明治大学文学部教授
文芸評論家
伊藤 氏貴

ことばと学びとの関係が複雑なのは、ことばとは、それ自体が学ぶ目的であると同時に、学ぶ手段でもあるからだ。それは国語という教科の難しさでもある。

たとえば先年、少なからぬ中学生がさまざまな教科の教科書を正しく読めていないのではないかという指摘が世間を震撼させたことがあったが、それは学ぶ手段としてのことばの力の欠如による。説明の文章が理解できなければ、どの教科でも学びの目的は達成できない。だからもちろん、国語という科目にまずその力をつけることが求められるのは当然だろう。

だが、国語がそこに終始してよいわけではない。学ぶ手段としてのことばの力は、あらゆる学びの基礎であればこそ、いつまでもその段階に留まっていたよいはずはないし、説明のために書かれたいわば一意的な文章は、生きている中で出会うことばのほんの一部でしかない。

聞くにせよ読むにせよ、他者のことばを受け取る際に最も重要なのは相手の意図を汲むことであるはずだ。表面的なことばの意味だけわかってもしかたない場合すらある。

たとえば、京都で立ち話をしていて、相手が「ええ時計してはりますな」と言った場合。

たとえば、熊野の医師、大石誠之助が大逆事件[※]で死刑になった際に、佐藤春夫が「患者の死」と言い、与謝野鉄幹が「いい気味」、「大逆無道の誠之助」と言った場合。

一つめはことばの表面的な意味から、「時間を気にせよ」という別の意図を推察しなければならず、二つめは、ことばの表面上の意味とはまったく逆に死者を深く悼む意図が汲める。一つめはその土地特有の文化的文脈、二つめは言論の自由に関する当時の時代背景を知らなければ、正しく読む＝語り手の意図を汲むことはできない。

こうなると、ことばの力が他教科の基礎という

ばかりでなく、ことばを正しく読み取るために他の教科の学びが必要になってくる。

ことばは実のところそれだけを抽出して学ぶことはできない。どんなことばにもそれを発出した者の意図があり、それを汲むには、複雑に絡み合うことばの背景を学んだり想像したりしなければならない。現在、とりわけ SNS の発達により、人は以前よりも大量の活字を日々やりとりするようになっている。しかしそこで見られるのは、ことばの真の意図を理解しようともせず、表面的な意味に対して脊髄反射して互いを攻撃し合う、なんとも不毛なやりとりではないだろうか。

到底共感できない言説に対して、しかしどういう意図でそれを発したのか、どういう背景がそこにあるのかを考えることで、共感は無理としても、相手がなぜそう言うのかまでは理解できる。そこからやっと建設的な議論がはじまる。

文学作品は、少なくとも教科書に載るような作品は、主人公がすぐに共感できるような人物ではないだろう。だからこそ、その言動の真意を探ることで理解を試みる。法令などであっても、そのことば上の意味だけでなく、それが定められたときの状況を踏まえ、定めた人たちの意図を汲まなければ、正しくその法令を執行することはできない。ことばの意図を汲むことを学ぶという点では、文学も実用的な文章も選ぶところはない。それをまったく別物のように扱うのは、ことばを学ぶことの意味が理解できていないというほかない。むしろ今求められているのは、ことばと学びの複雑な関係をそのままに捉える教育だろう。

※ 1910 (明治 43) 年に社会主義者や無政府主義者が明治天皇の暗殺を計画したとされる冤罪事件。共同謀議の罪で大石誠之助も起訴され、翌年に処刑された。

伊藤 氏貴 (ITO Ujitaka)

1968 年生まれ。明治大学文学部教授。早稲田大学第一文学部を経て日本大学大学院藝術学研究科修了。藝術学博士。2002 年に「他者の住処」で第 45 回群像新人文賞 (評論部門) を受賞。「高校生直木賞」実行委員会代表。近著に「読む技法 - 詩から法律まで、論理的に正しく理解する」(中公新書) などがある。

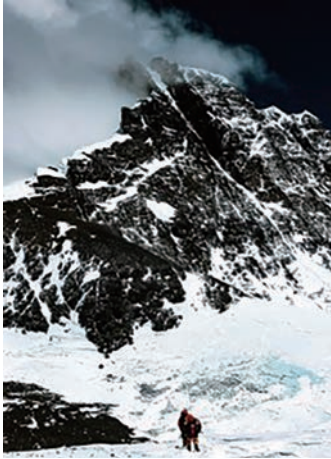
心を豊かにする 未知の風景を求めて

エベレストへの挑戦がもたらしたもの

世界中の僻地や極地に赴いて撮影を行ってきたが、2021年のエベレストへの撮影はあらゆる意味で特別なものでした。8848mという標高に一般のかたはピンとこないかもしれないですが、人間が高所順応できる限界が6500mほど。さらに8000m以上は「デスゾーン」と呼ばれていて、バクテリアすら活動停止する「死の世界」なのです。

最も過酷だったのは、標高6400mの地点に設置する「キャンプ2」で、天候が悪化したときです。前進すれば命の保証はないし、撤退もできません。せめてよく寝て体力を回復させたいところですが、極度の低酸素により1時間ぐらいで覚醒してしまふ。目覚めなければそれはそれで、体内の酸素が失われ死に至ります。実際、僕らとは別チームの一人が朝になっても起きてこず、テントの中で亡くなっていました。

天候は翌日も回復せず、体力は刻一刻と奪われ、食料も減ってゆく。そんな状態が5日間も続きました。「ここで死ぬのだろうか？」という恐怖が脳裏をよぎるのですが、悩むこと自体が体力を消耗させるため、ただ無心で食料を節約しながら吹雪の時間をやり過ごしました。過酷な大自然に対峙したとき、人は人事を尽くして天命を待つことしかできない。その絶対的な厳しさを骨身に叩き込んでくれたのが、エベ



ストという山でした。

山頂に辿り着き、酸欠で嘔吐しながら撮影をしたものの、もはや一滴の力も残っておらず、何度か膝から崩れ落ちて、また立ち上がってを繰り返しながら、言うように山を降りました。けれど、その途中で「今度は海を撮ってみたい」という考えが頭をよぎったのです。「死の世界」にいた反動で命あふれる海に惹かれたのか？ 世界最高峰に到達できたことで、自分の境界域が広がったのか？ いずれにせよ、その翌年にはタヒチでザトウクジラを撮影していました。8000m峰に登り、海にも潜る写真家は世界でも珍しいらしく、今ではそれが僕のアイデンティティになっています。

写真家を目ざしたきっかけ

父と母は二人とも考古学者で、遺跡だの、古墳だのと、数千・数万年単位の話が飛び交う家庭で育ちました。その影響からか、幼い頃から大自然やより広い世界に関心があり、学生時代はバックパッカー一つでよく旅に出していました。

転機は24歳の頃、世界一周の途中で訪れたアイスランド。現地の子どもたちに旅先で撮った写真を見せていたのですが、砂漠のカットで「わあー」と歓声が上がったのです。その後は「暑いのか？」「動物はいるのか？」と質問攻め。彼らの目は眩しいほど輝いていました。さらに、インドの山奥でおじいさんにニューヨークの写真を見せても全く同じ反応が……。

想像もしていなかった未知の景色は、国籍や性別、年齢に関係なく人の心を豊かにする。そのことに気づいた瞬間「これで生きていきたい」という強烈な思いに駆られ、写真家を目ざすことにしたんです。

子どもの好奇心に火をつける

写真展の会場でも、子どもたちは作品を前に「こはなはなに？」と好奇心を爆発させています。それどころか珍しい動物や

地名を知っている子もいて、保護者のかたが「そんなこといつ覚えたの？」と驚くことも少なくありません。子どもたちは好奇心の塊で、自らが惹かれるものを本能的に選び取る天才だと実感します。

生きていく上で大切なことは「自分の好き」を知っていることだと僕は思います。それが仕事になるとかそういうことではなく、「何をしているときにワクワクするのか」「どんなときに心が満たされるのか」をわかっているということです。もし、好きなことがわからなければ、読書でも映画でも、写真でも旅でもいい。自分の世界の外にあるものにふれてみてほしい。自分に向き合うことも大切ですが、未知のものに出会ったときの感覚の重なりが、自分という輪郭を形作っていくのだと思います。大人の役目とは、そういう機会をできるだけ多く作ってあげることではないでしょうか？

今年は7大陸最高峰のうちアコンカグア、デナリ、ヴィンソン・マシフの三座のほか、シロナガスクジラのいる海に向かう予定です。僕の写真が子どもたちの好奇心に火をつけるきっかけになれば、本当にうれしいですね。

自然写真家 上田優紀 (UEDA YUKI)

1988年生まれ。24歳のときに世界一周の旅に出かけ、1年半をかけて45ヶ国を回る。帰国後は株式会社アマナに入社。2016年よりフリーランスとなり、想像もできない風景を多くの人に届けるために世界中の極地、僻地を旅しながら撮影を行っている。著書に『エベレストの空』『七大陸を往く、心を震わす風景を探して』（ともに光文社新書）。2026年に写真集『ARCA この星の物語』（小学館集英社プロダクション）をリリース。



Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆「AIは回答し、哲学者は問いかける」。巻頭インタビューの小川仁志先生の思想に共鳴しました。人は問いの中で生き方を探し、見つけ、発見する。数秒で答えが得られる問いは「問い」とは言えない。問いは自分自身の「生」の欲求からくる、自分自身の心の叫びだと思えます。
- ◆夜間中学の本来の趣旨である「学び直し」を実践している松戸市立第一中学校みらい分校の多様性を追求する実践に拍手を送りたい。
- ◆きょういく見聞録①の「9年間育て育む『自分を舵取りする力』」はクラウド型表計算アプリを活用した「キャリアパスポート（電子版）」の活用により、成長の記録の内容を発達段階に応じて質的に高めたり、保護者がコメントを入力したりするなど、さまざまに工夫されています。日常的な自己管理能力を支える「手帳（スケジュール帳）」の活用も、効果的な取組です。

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。

これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつなげていく。そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版